

「手旗君とロープさん」

演者 くまさんコンビ

手旗 : 松田 (小学5年生)

ロープ : 大田 (小学5年生)

手 (松田) 手旗 手旗を持ってでる (左手に持つ)

ロ (大田) ロープ ロープを持っている (右ポケットに入れる)

手 「はい〜。ボーイスカウトのエリートグッズ、手旗君で〜す」

ロ 「こんにちは〜。僕が本当のボーイスカウトのエリートグッズ、ロープさんで〜す」

手ロ 「よろしくお願いします」

手 「君ねえ、最初からなんだけど。今、自分の名前にさんを付けたでしょう。ロープさんっておかしいがな。おまけに『本当の』って、私はにせものかいな？」

ロ 「それは、失礼。てばた君。君も自分のこと手旗君って言うのはおかしいがな。あのにぎやかな さかな君みたいだよ」

(一瞬 間。ふたり揃って、ちょっと上を向きながら)

手ロ 「へへへへへへ」

手 「ん。誰も笑えへん」

ロ 「(しんみり) やっぱりオードリーには勝てんか、(笑う) へへへへへへ」

手 「そこは泣くところでしょう」

ロ 「ほう。それは置いておきましょう」

手 「置いたらいかんよ」

ロ 「ところで、君はなんで、手旗を持っているの。漫才に関係ないでしょう」

手 「この手旗ですか。それはこれ、(手だけ、スカウトサイン)」

ロ 「ほう〜〜う。」

手 「なんやねん。気味の悪い」

ロ 「ほう。ほう。ほ〜う。ほけきよ」

手 「なに、うぐいすやってんねん」

ロ 「ほ〜う。ちょきかいな。」

手 「(サインをしながら) これは、ちょきじゃないでしょう。カブスカウトとして恥ず

かしいよ」

ロ 「カブスカウトは、進んでジャンケンをする」

手 「そんなカブ隊のさだめはありません」

ロ 「ほう。ほけきよ。ぼくはじゃんけんの話をしているんだけど、君はどうしてもカブ隊のさだめの話がしたいかね」

手 「君は、このサインが目に入らぬか」

ロ 「ほう。水戸の御老公でございますか。ははあ〜。」

手 「そうともいうが」

ロ 「言わへん。言わへん。ちょっとおちよくっただけです。」

手 「このサインが目に入っているでしょう」

ロ 「じゃあ、きみはジャンケンが目に入るのですか」

手 「そんなん入れたら目が痛いかな」

ロ 「ほ〜う。サインは目に入れても痛くないというご意見ですか。」

手 「もう、さては、ローブ君、君はカブスカウトではないな。」

ロ 「カブスカウトは、すなおであります。」

手 「最初からちゃんとやりなさい。じゃあ、これ。」

ロ 「カブサインであります。」

手 「じゃあ、カブサインの意味はなに？」

ロ 「えー。サインはブイであります」

手 「君、本当にやくそくをしたのですか」

ロ 「ほう。君とやくそくした覚えはないですよ」

手 「もう時間がかかるから答えを言いますよ」

ロ 「ほう。せわしないやつやなあ。人生、余裕をもたないといけないよ。塾に行くのもいいけど、カブスカウトに参加するぐらいでないと、人生はつまらないことになりますよ」

手 「君のように、何も知らないのは、余裕とは言わないけど。まあ、話は進めないとみんなが退屈しますから。」

ロ 「ほう。ほう。どうぞ、進めてください。」

手 「カブサインは、カブスカウトの二つのやくそくと動物の耳の形を表しているんです」

ロ 「確かに。だから？」

手 「手旗をもっている理由は、カブサインと同じように2つの訳があるの」

ロ 「いや、まいりました。でも、それだけのためにえらく手間がかかったね。」

手 「そりゃあ、漫才だからですよ」

ロ 「じゃあ、一つ目の訳は？」

手 「もちろん、私が手旗君というのが、わかるようにですよ」

ロ 「ほう。ごもっともな理由ですね。ところで、それなら、僕もローブ君とわかるよう

に持っているよ」

手 「どこにロープがあるのよ」

ロ 「じゃあ〜ん。(大げさに見えるようにポケットからロープを出す)」

手 「中にしまっていたら誰も分からんでしょう」

ロ 「カブスカウトは、たがいに助け合います。」

手 「それ、どういう関係があるの。それも言うなら、カブスカウトは、・・・カブスカウトは、・・・」

ロ 「考えてもでてこないよ。無理に言うことはないですよ。」

手 「わかったわ。カブスカウトはたがいになぐさめあいます。」

ロ 「おう、よくできました。うそ、たがいにたすけあいますだろ」

手 「それは、きれいなロープですね」

ロ 「話変えるかー。うん。これは、ちょっと宣伝。

(ドラエモンのように言う) 豊中2団! オリジナル練習用ロープ!」

手 「君はドラエモンか。(自分もロープをお腹から取り出す) 私も持っていますー」

ロ 「お腹から出しとる。君がドラエモンや。」

手 「ほう。ほう。」

ロ 「どこでも練習できまーす。もやい結びもできまーす。」

手 「では、やってみてください」

ロ 「じゃあ。やります。」

手 「ただいま、もやい結びをやっています。わたしは見ています。たいへん楽になっております。はい。できました。拍手ー。」

ロ 「ありがとうございます。さて、2つ目の訳は？」

手 「私が、セリフを忘れたら手旗で合図しようと思ったの」

ロ 「ほう。グッドアイデアですね。でも僕はロープ君だよ。ロープ君が手旗君の手旗を理解できると思ったのかね」

手 「だって、ロープ社会のカブスカウトでしょう。手旗もできなきゃ、ボーイスカウトとは言わないですよ。」

ロ 「ほう。ごもっとも。で、その手旗でどうやるの」

手 「実は、まだ考えてなかった」

ロ 「そりゃ、なんですか。単なる飾りですね」

手 「まだ、セリフを忘れてないからいいんです」

ロ 「あれれ、なんだか、この雰囲気、ちょっと、期待感が高まってきましたね。早くセリフ忘れなさい。」

手 「それどういうこと」

ロ 「もう、手旗をやるところにきたんとちがうかな。」

手 「じゃあ、(左手の手旗を下で動かす)」

ロ 「それだけ？ 何を言っているかわからない」
手 「別に何も言っていないけど」
ロ 「ちゃんとやってみたら」
手 「じゃあ、横で解説をお願いします」
ロ 「セリフを忘れたら、エスオーエスと発信します。」
手 「(開始の合図)」
ロ 「本格的だなあ。今、発信する合図です。うけなきゃあ。(受ける)」
手 「(エス、オー、エスを打つ。うちながら一文字ずつ言う)
エ！」
ロ 「最初は、エです。かんたんですが、第二原画は、白旗が上になります。隊長がいつも、エとチの場合、白旗が上、エとチだから、Hが白旗と覚えるようにと言っています」
手 「ス！」
ロ 「スは、カタカナでなく、寸の字を書きます。寸の第2原画は赤旗が上です」
手 「オー！」
ロ 「オもエとスと横、縦が同じで、最後が第5原画になります。オーの伸ばす文字は第二原画です」
手 「エス！」
ロ 「最後にまたエスです。この解説は、僕の方がしんどいです。君は楽だねえ。」
手 「はい。うまくできました」
ロ 「でも、あまり役に立ちそうもないですね。」
手 「いえ、手旗とロープが、エリートグッズだということが分かってもらえました。」
ロ手 「お後がよろしいようで、ありがとうございました。」